

②② 木野山神社と狼様の休憩所

浮田の木野山神社は、湯谷へ抜ける細道が浮田川から別れようとする左手の小高い山のでっぺんにあります。山裾に木製の鳥居があって、くぐるとすぐに急傾斜の参道が続きますが、既に自然に還っていますので、とにかく頂上へ向いて汗をかくことになります。

頂上部の西北に伸びる平坦な細長い尾根が境内となっていて、奥にお社が建っています。どこにでも見受ける形の小社ですが、その裏側にある自然石の祠が目を引きます。地元の土師さんご夫婦のお話では、祠は狼様の休憩所で、高梁の木野山神社から来た狼様が、ここで一服して、各戸を訪問するとのこと。疫病除けに文久2年（1862）に勧請（分霊）したとのこと。コレラというお話はありませんでした。

これと似たような祠がここにもあります。高梁の木野山神社の里宮（遙拝所）から奥宮へむけておよそ2Km程登った山道の谷側3mばかり入った所にある落ち葉に埋もれた祠がそれです。

狼様の好物の塩がお供えしてあります。奥宮に登りますと、かなりな広さの境内の真ん中



高梁木野山神社奥宮参道脇の石祠

一段高い所に本殿、その両脇、左に「たかおかみ」、右に「くらおかみ」の社があります。この両社の社前に狼の石像が据えてあります。この狼様が疫病封じに出向くときの第一休憩所が山腹の祠、塩をなめなめ一服されるということか…？

ともかく、平成7年岡山市水道局刊行の「コレラ岡山」によれば、コレラ（漢字で「虎列刺」）の来襲は文政5年（1822）オランダ艦隊の来航により、長崎から北九州を席卷し山陰、山

陽、畿内に蔓延しました。これにかかると三日くらいでコロリと死ぬので俗称の「コロリ」がそのまま病名となったとあります。

この年、緒方洪庵は「虎狼利治準」に「我が医流蒙昧にして未だ開けず。その病勢新奇にして耳目に慣れず、故に的実の治法を立てこれを療せし者あるを聞かず。」と記しており、当時の日本医術では手に負えぬものであったことがうかがえます。

浮田に木野山神社が勧請された文久2年は第3回



浮田の木野山神社



神社裏の石祠 狼様の休憩所

ともかく、平成7年岡山市水道局刊行の「コレラ岡山」によれば、コレラ（漢字で「虎列刺」）の来襲は文政5年（1822）オランダ艦隊の来航により、長崎から北九州を席卷し山陰、山

陽、畿内に蔓延しました。これにかかると三日くらいでコロリと死ぬので俗称の「コロリ」がそのまま病名となったとあります。



奥宮の本殿両脇に鎮座するおかみ社

目のコレラ襲撃年に当たります。このとき、岡山城下では、8月28日から4日間にわたり城下各神社で疫病退散の大祈禱祭が行われ、町民残らず参拝するよう総年寄から布達が出されました。

医者に見放されるぐらいのものですから神頼みに走るのも当然のこと。いつの頃か、虎列刺の「虎」に勝つのは、おかみ（オオカミ）よりほかにいないという屁理屈で木野山神社の神輿を担ぎ出す一団が現れ、これが群衆心理をとらえ岡山城下は木野山熱で沸き返ります。

しかし、願いもむなしく明治10年（1877）、西南戦争従軍兵が神戸港で検疫も受けず、我先に帰路を急ぎ病原菌が全国にばらまかれ惨状を呈すこととなります。

この年から明治27年までの岡山県下のコレラ罹患者は14503人、うち死亡者は9911人にのぼりました。（前出、「コレラ岡山」より）



奥宮にある末社「くらおかみ社」



足守上之町の木野山神社

ということで、本来は山の神（大山祇命）を祭る木野山神社が、里方のあちこちに見えるのは、江戸時代末から明治にかけて疫病（コレラ）除けに勧請されたことによるものと推察されますが、念のためと思って伺った足守上ノ町と高松小山・馬揃（明治12年9月勧請）の2社に、問題の祠は見えません。高梁の山奥から遠路参上された狼様は、一服する間もなく家庭訪問を強いられたようです。浮田に比べ如何が思し召されたでありましょう…。

なお、余談ですが久米南町貴布祢神社境内続きにある奥御前社の「桑村の狼様」をお迎えするお家では、狼様が自由に出入りできるよう、屋敷外に「扉のない祠」を置くならわしがあるとのこと。（昭和52年岡山文庫刊行「岡山の民間信仰」）

話は長くなりましたが、今回の事の起こりは、百田奥の木野山様の石碑の脇にある祠のいわれを探るものでありました。足守上之町、高松小山は存外のものでありましたが、これ以上探る根気も失せ、百田の祠は木野山神社の狼様の休憩所とさせていただく次第であります。



百田の木野山様と問題の石祠



星神社境内の木野山神社 休憩室通用門あり

※ 浮田の木野山様は、文久2年から157年に亘る浮田でのお務めを終え、令和元年5月、土師さんに抱かれて高梁の御本社へお帰りになりました。